

CD

つい聴いてしまおう1曲

音楽教育学科音楽教育 4年

矢島未知子

モーツアルトの《2台のピアノのためのソナタ 二長調》と言われれば『のだめカンタービレ』を思いつく人も多いことでしょう。お恥ずかしい話ですが、映画化やドラマ化されたにもかかわらず、私は『のだめカンタービレ』というマンガがあつて人気が出ているということくらいしか知りませんでした。ふとある日、道を歩いていたらときに聴こえてきた曲が今回ご紹介させていただく《2台のピアノのためのソナタ 二長調》でした。

この曲はモーツアルトの弟子であつたヨーゼフ・バルバラ・アウエルンハンマーのために作曲された曲ということですが、私にはモーツアルトらしい華やかさの中にどこか嬉しさが見え隠れしているように感じます。2台ピアノだから出来るハーモニーの重量感や、掛け合いをすることができるとの嬉しさを面白さが曲中に溢れているような気がします。ピアノという楽器は、一人で幅広い音域を弾けることが長所ですが、逆にそのせいで特にピアノ2台で演奏する機会が少ないと思います。だからこそ、ピアノという大きな楽器を贅沢に2台も使つて演奏するこの曲には、他の人とアンサンブル出

来る嬉しさが詰まっていると思うのです。なんとと言っても2台のピアノを使った音のハーモニーの重量感は言葉で表せないくらいすごいものがあります。しかし、それを聴いている人に重たいと感じさせない作曲の仕方がモーツアルトの素晴らしいところだと思ふのです。

今回は個人的に好きなピアノリストであるウラディーミル・アシケケナージのCDを紹介させていただきます。彼は指揮者としても有名ですが、やはりピアニストとしての腕前は素晴らしいものです。モーツアルト特有の指が纏れそうになるパッセージも何となくこなしてしまふ技術面の高さには脱帽してしまいます。

また、私自身が子供のころからアシケケナージの演奏のCDを聴いていて、ピアノを好きになるきっかけになつた思い出深いピアニストの一人です。

図書館には、これ以外にもまだまだアシケケナージのCDがあるのでぜひ皆さんにも聴いていただきたいと思つています。そして、皆さんのお気に入りのピアニストになるとても嬉しいです。



請求記号●XD32714
『2台のピアノのためのソナタ 二長調/モーツアルト』
(ポリドール:POCL-3450)

●やじまみちこ 気付いたらもう4年生…先の見えない就職活動と目の前のことに追われて、毎日を生きていくことで精いっぱいな気がします(笑)

図書

苦しみの中の美しさ

演奏学科鍵盤楽器専修 2年

恵須川理津子

あなたは、どのような気持ちで今日を生きていますか。楽しいですか。退屈ですか。希望に溢れていますか。不安で仕方ないですか。

もし悲しみや苦しみの中にいるのなら、是非太宰治の「女生徒」のページを捲ってみてください。

「朝は灰色」だと言う主人公の少女。この物語には少女が朝起きてから夜眠りにつくまでの一日が、彼女の視点で日記のように書かれています。「悲しいことが、たくさんたくさん胸に浮かんで、やりきれない」、そんなふうになる少女の朝。父親を病で亡くしたせいか、少女の心には悲しみや寂しさが満ちています。それだけでなく、「どれが本当の自分だかわからない」といった思春期の少女らしい悩みや、自分の言動への後悔や自己嫌悪、厭世的な感情が頭の中を駆け巡ります。自分の心は汚いと言い、厭な子だと言い、わがままな子供だと言つて悲しむ少女の、自己否定の言葉の数々。けれど、その負のエネルギーに負けず劣らず輝きを放つのが、少女の願いの言葉です。

「早く強く、清く、なりたかった」「自然になりたい、素直になりたい」「みんなを愛したい」そして、まるで決意のような「美しく生きたい」と思います」という少女の清らかな心に、私は胸を打たれました。もし目の前にこの少女がいたら、私は「そう願えるあなたの心が美しい」と伝えるでしょう…。

喜怒哀楽の感情の変化が乏しくなった時、私たちは人間らしさをなくすのではないのでしょうか。きつと苦しみと喜びは表裏一体なのです。うまく世の中を渡っていくようにして痛みに鈍感になった大人には見つけられないものも、多感な故に傷付きやすい少女には見つけることができるのです。一日という短い時間の中で、彼女は何度かさやかな喜びを見つけたことでしょうか。神様がいそうな空の美しさ。百合の花のかぐわしさ。母親と二人きりで過ごす静かな夜。降り注ぐ星々…。幸せとは、おそらくこういうものなのです。悲しみの荒野にある日ふと咲いた一輪の花に、人は希望を見るのでしょうか。その見落としてしまいそうな小さな幸せを見つけてあげることが、美しく生きるということなのかもしれません。



請求記号●J25-716
『太宰治全集第2巻
《女生徒》』筑摩書房

●えすかわりつ。図書館にある全集は古いので、読みづらいと感じた方には角川文庫の女生徒をお勧めします。是非本屋さんなどで探してみてください。

図書

女性から見たシヨパン

演奏学科鍵盤楽器専修 2年 山本麻衣

プロアマ問わず、シヨパンが好きだという演奏家は本当に多いものです。特に女性のシヨパン嫌いはあまり聞きませんよね。なぜシヨパンの音楽に惹かれるのか、なんて思ったことはありませんか。本書ではシヨパンの魅力、女性の立場から実にユニークに読み解いています。

たとえば《練習曲第一番ハ長調》作品10-1の項。アクロバティックで男性的な、突風のよな練習曲です。本書では、ピアノリストにとって針の筵のような拷問のエチュードだと表現されており、私もこれには大いに賛成です。この曲を選んでレコーディングするピアニストは間違いなく自信家なので、「ハズレ」のCDがほとんど存在しないほど、とにかく難解な名作エチュードです。

ピアノを学ぶ私たちにとって、シヨパンの練習曲集は《革命》や《木枯らし》《黒鍵》など、言うまでもなく憧れとときめきの名曲の宝庫です。曲に標題を付けるのを嫌ったシヨパンですが、これらの曲にも素っ気なく「練習曲」とのみ名付けました。当時、練習曲といえ

ばツェルニーやクレメンティのような教則本的で、無味乾燥な内容が普通でした。その常識を覆す、芸術性の高い名旋律が次から次へと溢れ出す素敵な曲集です。なのに「でもこれ、全部練習曲ですか」といったツンとした差し出し方に、シヨパンらしい反骨精神を感じます。

かつて「シヨパンの曲は、絶対に振り向いてくれない男性のようだ」と語った女性ピアニストがいたそうですが、私もピアノ弾きの端くれとして賛同せずにはいられません。ツェルニーなどとは違って試練が大きい分だけ報酬も大きいものの、「振り向かせる」までの練習の辛さといったら！

本書はクラシック音楽好きの一般向けに、専門用語を避けて、女子会のようなミニーハーな文体でも読みやすく書かれているので、ピアノ科ならずとも楽しんでいただけるはずです。各曲のおすすめCDもジャケット写真付きで記載されています。ぜひCDを用意して、紅茶のおともに気軽に読んでいただけたら幸いです。



請求記号●J117-726
『クラ女のシヨパン/名曲案内』
室田尚子他 河出書房新社

●やまもとまい。世事に疎く、「もしドラ」のドラッカーが人名だと最近ようやく知りました。世間においていわれている気分です。